

大学校内の
売店で働く
ムチムチで色っぽい
巨乳のお姉さん

現在、丸岡大学（まるおかだいがく）という大学に通っている俺、高山慎太（タカヤマシンタ）は今夢中になっていることがある。

それは、うちの大学では珍しくキャンパス校内に大きな売店がある（普通はあるとしてもコンビニ程度だと思うが、小さなスーパーマーケット程度はある）のだが、ここで働いている死ぬほどエロい巨乳のお姉さんのことだ。

フットサルのサークルに入っている俺は、近頃メンバーたちと彼女についての噂話で持ちきりなのだ。

「それでよお、やっぱり霜ヶ先（しもがさき）のバス停で見たんだってよ！」

「じゃあ車で来てるってタイキが言ってたのは嘘ってことかよ？」

「そうだなあ」

「どこに住んでんだろう??」

「俺の予想では遠くから来てんじゃないかと思うんだけど・・・」

愛想がよく、それでいて妙にミステリアスな雰囲気もある。

とにかく色気があって、胸元はあえて強調せずともその大きさがはっきりと分かる。赤い売店の女子従業員用のエプロンが大きく盛り上がっているのだ。

みんな意識していた。

彼女がいる友人のユキナリやノブアキたちですら、一度“やってみてえ”なんて薄ら笑いを浮かべてやがった（笑）。

エロいことしか頭にない。そんな馬鹿な俺たちだけど、もういい大人だただこっそり噂話をするだけのガキではない。

“中2病”もちゃんと卒業したつもりだ。

だから、他のメンバーがほんの少しでもためらっているうちに勇気を出して行動に移す奴もいるわけで・・・。

初めて“売店で美人が働いてる”という彼女の噂が出てからわずか2週間後、どうやら英文科のメガネをかけた吉村って奴が彼女とセックスに持ち込んだらしい。

ちなみに俺たちはサークルやサークル外の友人関係、または学科で共通の仲間など、多種多様に交わる様々な人脈のネットワークの中で大学生活を楽しんでいる。吉村って奴は確か過去に1、2度聞いたことがある奴で、俺は親しくないのだけど、どうやらうちのサークルのド派手なトンガリ頭の髪形をしたユウキと同じ学科の知り合いらしい。

真面目そうではあるが、背が高くスタイルが良く、頭が妙に良い奴らしい。

「くっそお！マジかよ、俺も今に行こうとしてたのに！！」

狙っていた女性を取られた、と歯ぎしりしながら悔しがっていたのは、俺の一番の親友でありサークル仲間のダイチだ。

「はははっ！そんなに悔しがんなよなあ！女なんていくらでもいるだろお？」

「いやいや、悔しいって！今からでもイケるかな？あの子は昨日も働いてたし。まだ吉村って奴だって付き合ってるわけじゃないんだろ？」

「いや、それは知らないけどさあ」

「・・・っておまえは何でそんな落ち着いてるわけ？おまえだって夢中だったじゃん？？なんでよ？」

俺は何となくごまかして笑っていた・・・。

ダイチは大学で知り合った唯一無二の友人だ。

だけど・・・。

全部全部打ち明けなくたっていいじゃないか！！

俺が、ダイチが“取られた”と悔しがるその彼女ともはや切っても切り離せない関係にあることを。

吉村という奴が彼女とセックスをしたという噂は、実はこの俺がでっち上げた“ハッターリ”であった。

本当だったのは、吉村が彼女に言い寄ったという事実だけで。

実は、彼女とセックスをし、彼女のそのムチムチの体を全部いただいたのはこの俺なのだ……。

彼女の噂が出始めてから俺は、間を置かずに彼女に言い寄ってみた。

そして彼女を連れ出し、二人きりになることに成功。

彼女の名前はミレイと言う。

——体験版はここまでです——